

## 冬の花ビワ（枇杷）

田中潔氏（大日本山林会）提供



花房はどっしりとした円錐花序。70～100個の花をつける。一つひとつの花径は1cm。クリーム色を帯びた白い花卉。花はビロード状の、茶色の軟毛が密生する防寒コートにくるまれている。

真冬に咲く枇杷の花は、用意周到な受粉戦略を準備する。花期を長くし、多量の蜜を蓄えて、鳥と虫の来訪を待っている。冬の間の鳥や蜂にとっては、ありがたい蜜源植物である。その結果、受粉率は高い。枇杷の露地物の旬は6月。花が咲いてから収穫まで、摘房・摘蕾・摘果という作業を繰り返かえして、成り過ぎを押さえないと、果実が小さくなってしまう。



枇杷の葉は、薬用としての利用も盛んだった。江戸時代には、「枇杷葉湯売り」という商売があった。大きな黒い箱を二つ、天秤棒でかついだ。片方に釜と薬罐を入れ、枇杷の葉に肉桂や甘草などをまぜ、道端で煎じて飲ませた。暑気あたりの薬だった。今風に言えば、熱中症の薬。水分補給に不可欠だったのだろう。また、枇杷の葉は、浴料として皮膚を滑らかにし、アセモ、湿疹にも効果がある。

（フォレストコンサル 130号から）